

産婦人科外来で取り扱う比較的軽症な感染症に対する T-3262 の使用成績

館 野 政 也

富山県立中央病院産婦人科*

T-3262 について臨床検討を行ない次の結果を得た。

- 1) 8例の産婦人科領域感染症（感染流産1例，バルトリン腺炎1例，バルトリン腺膿瘍1例，外陰部膿瘍1例，直腸腔ろうの感染1例，骨盤腹膜炎1例，および乳腺炎2例）に T-3262 が投与され，全例に自覚的症状の改善がみられ，有効率は 100% であった。
- 2) 細菌学的には，検出された *Enterococcus faecalis*, *Bacteroides corporis* に有効であった。
- 3) 副作用，臨床検査値の異常は8例中1例にも認められなかった。

Key words : T-3262, ピリドンカルボン酸系合成抗菌剤, 産婦人科感染症

産婦人科領域における感染症の中で殊に骨盤内感染症や子宮付属器炎などの場合には，特別な場合，例えば Douglas 穿刺などにより骨盤内容物の採取できる場合は別として，それら臓器の位置的關係から起炎菌の証明が不可能な場合が多く，感染症と思われる症例に対する治療に当っては使用する抗菌物質の選択に迷う場合が少なくない。そこで，これら感染症の治療に当っては広範囲抗菌スペクトラムの抗菌物質の使用を余儀なくさせられる。

T-3262 は富山化学工業(株)が開発された新しいピリドンカルボン酸系抗菌物質であり，グラム陽性菌，グラム陰性菌および嫌気性菌に対し広範囲な抗菌スペクトラムを有し，強い抗菌力を示すことが報告されている。

今回，産婦人科外来において取扱うことの多い比較的軽症の感染症に対して，T-3262 を臨床応用する機会を得たので少数例ではあるが報告したいと思う。

I. 対象および方法

外来で治療の対象とした感染症症例は8例で，その内訳は感染流産，バルトリン腺炎，バルトリン腺膿瘍，外陰部膿瘍，直腸腔ろうの感染，骨盤腹膜炎の各々1例および乳腺炎2例，計8例である。

T-3262 の投与方法は，1錠 150 mg を1日3回食後に投与し，投与期間は5日～7日間であった。

菌の分離は夫々感染部位よりの膿などを培養して行なった。

臨床効果は症状の推移，白血球数，血沈値，CRP 値などを参考として総合的に判定した。

安全性は自覚症状ならびに血液検査，肝・腎機能検査の異常値の有無から検討を行なった。

II. 成 績

今回，比較的軽症の産婦人科感染症に使用した T-3262 の臨床成績は Table 1 の如くである。1例の感染流産 (No. 1) では下腹部痛，圧痛の改善などの臨床効果が認められ有効とした。3例 (No. 2, 3, 4) の外陰部感染症（バルトリン腺炎，バルトリン腺膿瘍，外陰部膿瘍各1例）に対してはいずれも臨時的に有効であった。また分娩後の直腸腔ろうの感染 (No. 5) では治療後，発赤，腫脹，疼痛は軽減し，本剤の有効性が示唆された。下腹痛を主訴とする骨盤腹膜炎 (No. 6) に対しても本剤は有効であり，治療後これらの自覚症状は軽減した。また，2例の乳腺炎 (No. 7, 8) に対しても本剤による治療後，発赤，腫脹，疼痛などの自覚症状はほぼ消失し，8例全例に有効であった。

細菌学的検討では，8例中2例で起炎菌が検出され，*Enterococcus faecalis* (No. 2), *Bacteroides corporis* (No. 5) の消失が認められた。

副作用，および臨床検査値の異常は8例中1例にも認められなかった。

III. 考 察

産婦人科領域で取扱う感染症は尿路感染症をはじめとして極めて多く，しかも骨盤腹膜炎や子宮付属器炎などは起炎菌に結びつく菌の証明は不可能である場合が多い。しかし起炎菌としては *Escherichia coli* が主役をなしている場合が最も多く，この点からいえば，グラム

Table 1. Clinical effect of T-3262

Case No.	Age	Diagnosis (Underlying disease)	Organism	Dose			Clinical response	Clinical effect	Side effects and abnormal laboratory findings
				Daily (mg×times)	Day	Total (mg)			
1	38	Infectious abortion (abortion)	No growth	150×3	7	3,150	B.T. 36.8 → 36.7 WBC 5,400 → 6,300 CRP (-) → (-) ESR 12 → 20	Good	(-)
2	56	Bartholinitis	<i>Enterococcus faecalis</i> → (-)	150×3	5	2,250	B.T. 37.0 → 36.7 WBC 4,600 → 4,700 CRP (-) → (-) ESR 38 → 10	Good	(-)
3	45	Bartholin's abscess	No growth	150×3	7	3,150	B.T. 36.4 → 35.6 WBC 5,000 → 4,800 CRP (-) → (-) ESR 10 → 15	Good	(-)
4	41	Vulvar abscess	No growth	150×3	5	2,250	B.T. 36.6 → 36.8 WBC 5,500 → 3,800 CRP (-) → (-) ESR 12 → 13	Good	(-)
5	28	Fistula rectovaginalis infection	<i>Bacteroides corporis</i> → (-)	150×3	5	2,250	B.T. 36.2 → 36.3 WBC 4,500 → 7,500 CRP (-) → (-) ESR 4 → 8	Good	(-)
6	26	Pelvioperitonitis	No growth	150×3	5	2,250	B.T. 37.0 → 36.8 WBC 4,400 → 4,600 CRP (+) → (-) ESR 20 → 6	Good	(-)
7	29	Mastitis	Unknown	150×3	6	2,700	B.T. 36.6 → 36.0 WBC 7,900 → 8,400 CRP (+) → (-) ESR 13 → 5	Good	(-)
8	31	Mastitis	Unknown	150×3	5	2,250	B.T. 36.7 → 36.2 WBC 7,100 → 5,600 CRP (-) → (-) ESR 16 → 22	Good	(-)

陰性桿菌に感受性の高い抗菌物質の使用を先ず第1とすべきであろう。その他、検出される菌としては *Klebsiella pneumoniae*, *E. faecalis* さらに最近では *Staphylococcus aureus* などが多くなっている²⁾。また、投与薬剤に関しては臓器内濃度分布の問題も重要であるが、最近の抗菌物質は本剤も含めて子宮内膜筋層、子宮附属器あるいは骨盤死腔液などへの到達性も優れていることが知られており^{1,3-5)}、勿論、今回の治療の主体となった外陰や乳房への到達度も高いものと考えられる。比較的軽症ではあるが、8例の感染症に対して全例有効であり、本剤は外来患者の感染症に対して気軽に使用できる抗菌剤と考えられる。

文 献

1) 第34回日本化学療法学会東日本支部総会、新薬

- シンポジウム, T-3262, 東京, 1987
- 2) 館野政也, 森本 勝, 村田雅文, 小嶋康夫, 中野隆, 佐伯吉則, 佐竹紳一郎: 抗生物質の婦人科術後感染予防的投与の成績と腔内細菌の変動。産婦人科治療 54: 367~376, 1987
 - 3) 館野政也, 矢吹朗彦, 浮田俊彦, 山崎嘉久: 産婦人科領域における cefazolin の使用経験。薬物療法 5: 169~174, 1972
 - 4) 高瀬善次郎, 藤原道久, 河本義之, 瀬戸真理子, 白藤博子, 内田昌宏: 産婦人科領域における T-1982 の基礎的, 臨床的研究。産婦の世界 35: 435~451, 1983
 - 5) 館野政也, 吉野 徹, 舟坂雅春: T-1982 の婦人性器内移行。Chemotherapy 30 (S-3): 169~174, 1982

T-3262 IN OBSTETRICS AND GYNECOLOGY

MASAYA TATENO

Department of Obstetrics and Gynecology, Toyama
Prefectural Central Hospital
2-2-78 Nishinagae, Toyama-shi 930, Japan

We carried out clinical studies on T-3262 with the following results.

- 1) T-3262 was administered to 8 patients with gynecological infections: abortion (1 patient), Bartholinitis (1), Bartholin's abscess (1), vulvar abscess (1), fistula rectovaginalis infection (1), pelvioperitonitis (1) and mastitis (2). Improvement in subjective and objective symptoms was observed in all patients and the overall efficacy rate was 100%.
- 2) The bacteriological response was effective against *Enterococcus faecalis* (1 strain) and *Bacteroides corporis* (1 strain), which were identified as causative organisms.
- 3) No side effects or abnormal laboratory findings were noted.